

## 初期の同志社と松山の人びと

竹 中 正 夫

### 一、伊予伝道の開始

- (1) 最初の伝道旅行
- (2) 自治と連帯
- (3) 伝道の全体像
- (4) 迎えた人びと

### 二、初期の同志社で学んだ人びと

### 三、松山のキリスト者の性格

- (1) 靈性の涵養
- (2) 日本の文化を通して
- (3) 福音による人間形成
- (4) 女子教育への情熱
- (5) 忍従の同労者

古くから伊予松山地方と同志社は深いかかわりをもっていた。初期の同志社には熊本、岡山、群馬地方出身の学生たちと肩をならべて松山からきて学んだ青年たちは少くなかった。どのような人たちが松山から初期の同志社に学ん

でいたのか、そして、彼らはどのような働きをなしたのか、さらに、彼らの中にはどのような気風と、性格が見出されるのか、このような問いは、きわめて重要なそして興味深い課題である。従来、同志社大学人文科学研究所「キリスト教社会問題研究会」の地域研究は、熊本、京都、群馬、東京、岡山、松本平、静岡、山口などの地方にわたっているが、瀬戸海を渡って四国に至っていなかった。本稿が、すでになされている地元の研究と相まって、四国地方におけるキリスト教史の研究の一助となれば幸いである。

## 一 伊予伝道の開始

### (1) 最初の伝道旅行

松山地方へのプロテスタント伝道は、アメリカンボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の J・L・アッキンソン (John Laydrow Atkinson, 1842—1908) と二人の撰津第一基督神戸公会の会員たち (鈴木清、小野俊二) が松山の人びとの招きによってなした伝道旅行にはじまる。それは一八七六 (明治九) 年の三月から四月にかけてのことであった。瀬戸海を渡ってはじめてキリスト教を伊予の地に伝えるという意義深い伝道旅行は四週間にわたってなされた。アッキンソンはこの歴史的な旅行について、ボストンのアメリカン・ボードのクラーク幹事宛の書翰 (一八七六年四月二十六日付) に詳細に報告している。それは、マケドニア人の招きに応じてなされたパウロのマケドニア伝道の記録 (使徒行伝一六ノ九以下) にも匹敵するものであり、日本のプロテスタント伝道史においても、これだけ刻明に初期の伝道の明暗を記したものは少い。幸いにして、同書翰の原文は『愛媛県史』のな

かの「愛媛のキリスト教」の部分に西村拓氏によって収録され、高尾哲氏によって訳出され、『松山教会百年史稿』の巻頭に全文が掲載されているので、初期の伝道と教会形成の経過の要点を辿ることが出来る。

(2) 自治と連帯

アッキンソン一行による松山伝道には幾多の冒険があった。もともと彼らは、松山の人びとから招かれたのであるが、出立間際に、しばらく旅行を延期するという手紙が松山から来た。彼らは、暫く待機したが、アッキンソンの国内旅行許可の期限もあるので、一ヶ月待ったのちにみきり発車のような形で彼らは出発した。一八七六年三月二四日のことであった。キリスト教の外国宣教師が来るということで、松山地方の神官や僧侶たちの間では反対をとなえるものがあらわれ、松山訪問の延期を要請した。それにもかかわらず、敢て決行されたのがアッキンソン一行の松山訪問であった。現に彼らを招いた一人であった黒田進は自宅で軟禁されていた。神道の指導者の一人は「もし誰かがこの外国人と二人の仲間がここに着く前に殺しさえしていたら、それから彼らを援けている二人の松山人を殺し、片付けていたらこの島〔四国〕でのヤソ教のそれが最後になっていただろう」とのべていたのをみても、この最初の伝道旅行に与った人びとの身に危険がともなっていたかを知ることが出来る。

彼らは観光をする誘惑をしりぞけ、適当な集会所を一日間三ドルで借りて、四月二日から毎日午後三時に集會を開いた。大体三五〇人位入るその建物は毎日一杯になり、最後の日は、出席者が四〇〇人に及んだといわれている。彼らは、松山で一〇〇〇部トラクト（伝道用小冊子）を配布し、約一〇〇冊の分冊聖書を売ることが出来た。

その後、伊予伝道は内外の協力を得て続けられた。一八八一（明治一四）年七月には、新島襄が松山高吉、アッキ

ンソン、上代知新、伊勢時雄などと松山を訪れ寿座という劇場を借りて昼夜にわたって大講演会を開いている。こうした努力がみのって、一八七九（明治二〇）年九月二日には、今治教会、一八八五（明治一八）年一月二八日には、松山教会が、同年二月一日には伊予小松教会が結成されるに至った。これらの三つの教会は当初から緊密な関係にあった。それぞれ、自主独立した教会の形成をめざしたが、彼らは互いに助けあい、協力しあって一つの伝道圏を形成していた。アッキンソンの一行は、まず松山に赴き、帰途今治で伝道した。一八七九（明治二〇）年六月同志社英学校を第一回の卒業生として卒えた伊勢（横井）時雄は、今治に赴任し、同年一二月に今治教会を創立し、小松、松山の伝道を援けた。のちに松山教会は有力な教会となったが、当初は今治教会で伝道師をつとめていた二宮邦次郎を初代牧師として迎えた。当時今治教会の伊勢時雄の月給は六万であったが、松山教会が二宮に謝礼として出し得たものは二円であった。二宮は、祈りの結果「牧師として月二円で招きに応じるが、教会の名誉のためにも、その二円は月給としてではないことにしてほしい」とのべた。松山の信徒は感激してそれに応じた。

松山教会の人びとは、教会を設立した翌年に松山女学校を創設したが、その運営には、喜多川久徴のように小松教会の信徒の支持のあったことを忘れてはならない。三つの教会は、それぞれの独自性を尊重しながら、互いに協力しあっていた。そこには、各個教会主義をこえた緊密な各個教会相互の協力関係があった。

### (3) 伝道の全体像

初期の松山教会の働きを辿ってみると、そこには、多様な働きが全体として繰りひろげられていたことを覚える。もとよりその中心には、聖書に根ざした福音の宣教があった。彼らは、ことばを通して、信仰を証し、キリスト教の

眞理性を弁証してやまなかった。教会設立の翌年に、先述のように松山女学校を設立し、一八九〇（明治三三）年に女子教育倶楽部を設置するなど女子教育に対する深い関心を示した。さらに、同年には二宮邦次郎を委員長として、海老名弾正や安部磯雄、本間重慶などを講師として第一回四国夏期学校を開いた。ついで翌一八九一年には、女学校教師ミス・ジャドソン（S. Judson）は、二宮邦次郎と協力して、普通夜学舎を設け、未就学児童の教育に力を尽すようになった。

社会的な面においては、一八八八（明治二一）年には、松山監獄を訪ねて伝道をなし、一八九〇（明治二三）には、伊予基督教青年会の春期総会を松山教会において開き、廃娼運動を可決し、伊予青年廃娼義会と称した。さらに、勤労青年のなかに健康を害するもののあることを覚えて、松山夜学校内に施療院を設置した。これらの社会的な関心は、その後大本新次郎によって設けられた松山同情館（明治三三年創立）の働きに受けつがれている。

今日、教会の働きを全体としてとらえることが重要であることが認められているが、すでに松山教会の働きにおいて、宣教（ケリグマ）、交り（コイノニア）教育（ディダケー）社会奉仕（ディアコニア）の四つが不可分の責務としてとらえられ、実践されていたことを知ることが出来る。

#### (4) 迎えた人びと

アッキンソン宣教師一行を松山に招いたのは、黒田進と菱田中行であった。菱田は、東京に出て慶応義塾を卒業し、一八七六年に帰松し、松山中学で教鞭をとっていた。黒田進も慶応義塾で学んだ人であった。当時県令をしてい  
た岩村高俊は、松山で洋学をおこす必要を覚え、慶応出身の草間時福を招いて英学所と勝山学校課外席とを合併し、

変則中学とし、草間を校長とした。さらに、一八七四（明治七）年に神戸に設立された攝津第一基督神戸公会の創立会員の一人であった前田泰一も慶応義塾の卒業生であったことなどを思いあわせると、当時神戸教会の指導者であったアッキンソンに松山訪問の招聘を出すに至った背景に慶応の人々の人脈のあったことをうかがい知ることが出来る。当時、神戸において『七一雑報』の発行人であった神戸公会員、今村謙吉も慶応義塾で学んだ人で、卒業後一時、高知で教師をつとめたことをおもうと慶応の人脈が神戸にあったことが指摘されよう。なお、今村と協力し『七一雑報』の編集にあたった村上俊吉は慶応義塾の卒業生ではなかったが福沢の影響をうけて神戸で志摩三商会という三田藩の関係者の商事会社で働いていた。右の二人の外に、松山においていち早くキリスト教に触れた人びととしてつぎのような人びとをあげることが出来る。

橋本タダ、東正信、同ツネ、岡本良知、村井知至、杉山重義、上代知新、尾崎重徳、永江為政などの人びとである。橋本タダは押川方義の実母である。押川方義は、一八四九（嘉永二年）年に橋本宅次とタダの三男として松山で生れ、押川家の養子となり、娘ツネと結婚した。なお松山教会の初期の名簿にある橋本経光は押川方義の実兄である。タダは一八八〇年にいち早く受洗した松山地方の初穂であった。翌年東正信、同ツネ、そして岡本良知の三人が受洗した。東正信は松山教会が一八八五（明治一八）年一月に設立されたときにあげられた三名の設立委員の一人であった。その息子正義は、一八六六（慶応二年）年に松山で生れ、さきの一八七六年になされたアッキンソンの松山伝道のとときは小学校三年であった。彼は松山中学に学び、一八八一年に、同志社に入学し、新島襄の薫陶をうけたが、病気のたために一八八四年一〇月には松山に帰って静養し、一八八七年三月から約一ケ年、松山女学校で教鞭をとり、一八八八年二月神戸教会伝道師に就任した。一八八九年から三年間会津若松で伝道、牧会にあたり、その間、一八九一年に按

手札をうけた。さらに同年一〇月には横田ます子と結婚した。その後、群馬県原市教会の牧会にあたり、一八九四年から一八九六年まで土佐教会の牧師をつとめ、一八九六年から宇和島教会の牧会を担当した。一八九八年から、松山駐在宣教師 S・ギューリック (Sydney Gulick) の働きを助け、松山女学校、松山中学で教鞭をとり、一九〇四年に宇和島教会牧師に就任し、八幡浜の伝道をたすけ、一九一二年からは松山古町教会の牧師をつとめるなど、地方伝道に尽力したが、健康すぐれず、一九一九年六月八日に永眠した。その名の示すように、正義信直の士であったが、其の温顔は接する人に無言の感化を与え、余技として和歌を好み、小冊子にまとめていた。そのうちより二首をしるしておく。

立 春

我宿のかけいの氷とけにけり春たつ今日のしるしなるらん

題しらず

はかなくも萩の上葉におく露をたのみにやどる月の影かな

村井知至は、一八六一(文久元)年九月一九日、村井親蔵の長男として松山に生れ、姉一人、妹一人の間の唯一人の男児、幼名は房之丞といい、式三郎を経て知至となった。『大学』の格物致知からとられたものと思われる。一八七六(明治九)年の春アッキンソン一行が松山に來訪したとき彼は一五才で、草間時福が校長をつとめていた変則中学校(県立松山中学の前身)で学んでいた。村井の自伝『蛙の一生』にはそのことは記されていないが、彼が商人を志して上京し、三菱商業学校に入学したのは一八七六年の夏であったから、松山にいたものと考えられる。一八七八

(明治二一)年、村井は実地に商業貿易を学ぶために横浜に赴き、宣教師バラの英語塾で学び、横浜税関吏試験に合格して税関につとめるようになった。たまたま病に倒れ、税関はやめさせられ、経済的にも精神的にも苦悩を体験したことから、キリスト教に改信、一八七九年横浜海岸教会で稲垣信から受洗した。当時親しくしていた同志社の卒業生河辺久治のすすめで、一八八一(明治一四)年九月同志社普通科三年に編入学した。なお『京都第二公会姓名録』によると村井知至は一八八三年二月横浜一致教会の薦書により京都第二公会に転入会している。そこで彼は新島襄の影響をうけ、当初は貿易を志していたが、のちには、日本国民の精神的救済を志すようになった。彼は同志社における生活をつぎのように記している。

私は同志社入学以来卒業まで三ヶ年を同校に過したのであるが、其間私の得た最大のもので云へば、いふまでもなく新島先生の精神とその感化とである。(中略)一言で云はゞ先生は基督教の偉大なる精神によりて洋化され聖化されたる大和魂の持主であつた。(中略)実に救国済民の四字は先生の魂であつた。私は入学の当時尚貿易を以て将来の目的としてゐたのであるが、遂に先生の精神に感化され、日本国民の精神的救済を以て我が畢生の事業とするに至つたのである。

村井は一八八四年に同志社英学校を卒業し、今治で伝道に従事し、アンドーバー神学校に学び、帰国して、一八九三(明治二六)年九月に日本組合基督教会の教職として按手札をうけ、翌年より一年間本郷教会の牧会を助け、再渡米し、一八九七年に帰国し、翌年から東京外国語学校教授となった。一九二四年には、第一外国語学校を創設し校長となるなど、わが国の外国語教育の発展に尽力した。その間、同志社時代に親交を結んだ安部磯雄、岸本能武太などと共に社会主義運動に関心を寄せ、一八九八年一〇月には、社会主義研究会をおこして会長をつとめたりした。彼には『社会主義』という著書がある。量的には比較的小著であるが近代日本の社会主義研究の黎明期に、社会主義を正面からとりあげた最初の文献として価値あるものである。<sup>7)</sup> 第二次の留学から帰ってからは、ユニテリアン協会に属



し、三田の惟一館で説教することもあった。しかし、後述するように、彼はユニテリアンの思想は、あまりにも理性的で、自発的な宗教体験を把握していないとして斥け、松村介石などと共に、日本の土壤に則した宗教的覚醒を志向していた。晩年は蛙人と称し、同じく鎌倉に住んだ同志社時代の友人辻密太郎と交友をなし、十ヶ条からなる健康法をととき、八三才の天寿を全うし一九四四年二月一六日に永眠した。<sup>(8)</sup>

松山出身の組合基督教会の教職者に上代知新<sup>(よむ)</sup>がいた。彼はもともと菅五郎左衛門とミマの三男として、一八五二(嘉永五)年七月五日に生れた。淳一郎、主馬之介の二人の兄があった。一八六九(明治二)年一月に上代さい子と結婚し、上代家をうけついだ。<sup>(9)</sup>一八七五(明治八)年七月四日大阪梅本町公会で新島襄から洗礼をうけ、伝道者となる決心をし、一八七六(明治九)年梅本町公会の牧会を担当し、一八八一年接手礼をうけて大阪教会牧師に就任した。同年七月今治教会堂献堂式を契機として四国に渡った新島襄の一行に加って松山を訪問し、七月五日に松山の劇場(寿座)で開かれた大講演会では、新島襄、松山高吉、アッキンソン、伊勢時雄などの有力な講師の先鞭をきって、冒頭に「開会の趣旨」をのべている。<sup>(10)</sup>彼は地元出身の最初のプロテスタント牧師であった。

上代知新は、その後、高梁、落合、津山など岡山県の伝道にあたったが一八八九(明治二二)年事情によって一時伝道界をしりぞいていたが、ハワイの伝道に携つたのち、福島県須賀川町の福音教会の牧師となった。山陽女学校の校長をつとめた上代淑子は彼の長女で一八七一(明治四)年に松山で生れている。

なお、上代家の出身で日本組合基督教会の最初の婦人伝道師となった渡部文について簡単に触れておく。彼女は一八四八(嘉永元)年六月九日、父上代左内、母幸の子女として、松山二番町に生れた。一六才より一九才まで旧藩侯の母堂に仕へ、一九才のとき、渡辺慎と結婚、慎は病身のため離別する悲哀をなめ、一八八一(明治一四)年実家の

上代知新を頼って大阪に出て、翌年九月一日宣教師デフォレストより大阪教会で受洗した。一八八七（明治二〇）年、組合基督教会の依頼をうけて、伝道師として、郡山、奈良両教会に赴き、ホワイト宣教師を助けて、伊勢、津の伝道にあたり、伊勢山田岩浦町の講義所を設け、迫害をうけながら伝道にあたった。その後、亀山、福井などで伝道にあたり、大阪に帰り、ギュリック夫人の伝道をたずけていたが、健康を害し、晩年は東京に移って療養をした。<sup>11)</sup>

警醒社が一八一八（大正七）年に創立三〇年を記念して出版した『信仰三十年基督者列伝』をみると、さきの一八七六（明治九）年のアッキンソン一行の松山訪問のおり、はじめてキリスト教に触れた人として、永江為政と尾崎重徳をあげることが出来る。永江為政の父は永江為輝、母は直子といい、一八六一（文久元）年二月一〇日に松山に生れた。一八六九年藩立明教館に入り漢字を修め、一八七一年には、勝山学校中等科に入学し、さらに一八七六（明治九）年には、松山英学所で学び、間もなく東上、三菱商業学校に入り、一八七九（明治二二）年に卒業し、翌年札幌農学校に入学、一年ほどして退学して、新聞記者となり、一八八一年『北海道拓殖新聞』主筆、『南海日報』（高松）、『大阪商況新報』などの主筆をつとめ、一八九二年大阪毎日新聞経済部に入り、東京支局長などをつとめ、のち自営で新聞、雑誌の発行を試み『大阪経済雑誌』、日刊『大阪商業新聞』、『大阪朝報』、『独立新聞』、『浪速新聞』などを発刊したが経営難を拂底することは出来なかつた。

キリスト教に関心をもつようになったのは、さきの一八七六年のアッキンソン訪問のときに、キリスト教の話をきいたのがきっかけで、その上、押川方義、吉田信好、杉山重義、高木明輝のような同郷の先輩でキリスト教を信奉する人たちの感化があつた。

彼が大阪に出たのは、一八八六（明治一九）年で当時は欧化主義の盛んな頃で、大阪において、リバイバル運動がお

こり、『立憲新聞』の記者であり、天満教会員であった松井信次郎の導きによって天満教会に出席するようになり、一八八八（明治二一）年三月に本間重慶から受洗した。<sup>13</sup>

アッキンソン伝道に接したもう一人の松山の人、尾崎重徳は、一八六一（文久元）年八月一八日に父尾崎重通、母房子の子として、松山に生れ、幼名を満といった。松山藩豊明教館で学び、のち県立師範学校で学んだ。アッキンソン宣教師一行の松山伝道によってキリスト教に触れ、後、今治の伊勢時雄、真鍋定造などの指導をうけ、聖書を学んだ。彼は、カトリックの神父深堀達右衛門の感化をうけ、一八八六年に松山天主教会で洗礼をうけ、広島天主教会で神父の補佐をなし、再び松山に帰ったが、深堀神父が長崎に転じたので、教会の仕事を離れた。晩年、一九一四年ごろより健康を害ねたことから再び教会に関心をもつようになり、今治教会露無文治牧師の熱心なすすめと祈りに導かれて一九二〇（大正）年一〇月一日今治教会に転会した。その心境をつぎの漢詩に托して表明している。<sup>14</sup>

世路間関幾変遷 神恩優渥似深淵

慚吾落日無餘命 罪過曾經三十年

## 二 初期の同志社で学んだ人びと

同志社に現存している初期の同志社英学校の生徒名簿のなかから愛媛県出身の人びとを摘出してみる。

(一) 同志社英学校生徒名(明治一七年四月)

|       |     |    |     |
|-------|-----|----|-----|
| 五年生   | 伊予国 | 堀  | 正義  |
| 〃     | 〃   | 村井 | 知至  |
| 〃     | 〃   | 重見 | 周吉  |
| 三年生   | 〃   | 池田 | 徳孝  |
| 〃     | 〃   | 中川 | 虎一郎 |
| 二年生   | 〃   | 松浦 | 政泰  |
| 〃     | 〃   | 武市 | 庫太  |
| 一年生   | 讃岐国 | 高木 | 遷   |
| 〃     | 伊予国 | 矢野 | 広太郎 |
| 〃     | 伊予国 | 吉田 | 清太郎 |
| 邦語神学生 | 〃   | 宮川 | 富次郎 |
| 〃     | 〃   | 小野 | 忍   |

(二) 同志社英学校生徒名(明治一八年四月)

|      |       |    |    |    |
|------|-------|----|----|----|
| 神学科生 | 邦語科一年 | 愛媛 | 富田 | 元資 |
| 〃    | 邦語科予備 | 〃  | 竹内 | 甚吉 |

普通科生

|     |    |    |     |
|-----|----|----|-----|
| 五年生 | 愛媛 | 池内 | 徳孝  |
| 〃   | 〃  | 中川 | 虎一郎 |
| 四年生 | 〃  | 兼頭 | 和策  |
| 〃   | 〃  | 松浦 | 政泰  |
| 三年生 | 〃  | 増田 | 雅太郎 |
| 〃   | 〃  | 山田 | 直太郎 |
| 二年生 | 〃  | 吉田 | 清太郎 |
| 〃   | 〃  | 藤井 | 武三郎 |
| 〃   | 〃  | 広川 | 友吉  |
| 〃   | 〃  | 堀  | 滋三郎 |
| 〃   | 〃  | 岡本 | 良知  |
| 〃   | 〃  | 矢野 | 広太郎 |
| 〃   | 〃  | 吉田 | 晴太郎 |
| 一年生 | 〃  | 増田 | 知次郎 |
| 〃   | 〃  | 西本 | 元太郎 |

(三) 同志社英学校生徒氏名一覽(明治二二年一月)

|             |     |    |   |
|-------------|-----|----|---|
| 下讃岐国那珂郡金蔵寺村 | 三年生 | 和泉 | 勝 |
|-------------|-----|----|---|

|                  |     |     |     |               |     |    |      |
|------------------|-----|-----|-----|---------------|-----|----|------|
| (伊予国)温泉郡松山北京     | 一年生 | 西村  | 清雄  | 越智郡本町         | 二年生 | 村上 | 幾太郎  |
| 伊予国越智郡今治本町       | 三年生 | 堀   | 滋三郎 | 越智郡今治本町       | 一年生 | 村上 | 信助   |
| 〃 今治室屋町          | 一年生 | 富田  | 恭平  | 伊予国南宇和郡内海浦    | 一年生 | 浦和 | 八郎   |
| 讃岐国香川郡御廐村 别科神学   | 二年生 | 小笠原 | 論之助 | 伊予国北宇和郡高田村    | 二年生 | 国松 | 久馬一  |
| 伊予国越智郡本町         | 三年生 | 越智  | 豊治  | 伊予国北宇和郡宇和島掘端通 | 二年生 | 久米 | 千兎太郎 |
| 伊予国西宇和郡蔵貫村       | 二年生 | 大塚  | 多丸  | 伊予国越智郡新町      | 一年生 | 山田 | 直太郎  |
| 伊予国北宇和郡宇和島富沢町    | 〃   | 岡本  | 牧夫  | 伊予国宇摩郡金川村     | 三年生 | 山川 | 隆次郎  |
| 讃岐国那珂郡森村         | 一年生 | 岡田  | 述   | 伊予国越智郡大新田村    | 〃   | 矢野 | 育太郎  |
| 伊予国温泉郡立花町        | 〃   | 渡辺  | 一保  | 伊予国越智郡今治      | 一年生 | 柳瀬 | 益一   |
| 伊予国喜多郡大洲村        | 〃   | 甲斐  | 真直  | 伊予国宇摩郡入野村     | 〃   | 山中 | 徳寿   |
| 伊予国温泉郡松山玉川町      | 四年生 | 吉田  | 清太郎 | 伊予国今治風早町      | 二年生 | 柳瀬 | 実次郎  |
| 越智郡今治米屋町 别科神学    | 四年生 | 竹内  | 甚吉  | 讃岐国丸亀六番町      | 二年生 | 松岡 | 正福   |
| 伊予国温泉郡松山三番町 别科神学 | 三年生 | 園田  | 重賢  | 伊予国越智郡今治新町    | 四年生 | 増田 | 知次郎  |
| 伊予国越智郡朝倉下村       | 三年生 | 長井  | 平三郎 | 伊予国東宇和郡明間村    | 一年生 | 古谷 | 久綱   |
| 温泉郡千船町           | 二年生 | 中村  | 久熟  | 伊予国久米郡来住村     | 三年生 | 岸  | 愛三   |
| 伊予国越智郡今治村        | 一年生 | 長尾  | 忠雄  | 伊予国越智郡今治村     | 二年生 | 光藤 | 忠太郎  |
| 伊予国越智郡有津村        | 三年生 | 村上  | 春太郎 | 伊予国東宇和郡卯之町    | 二年生 | 清水 | 伴三郎  |

同上 同上 清水謙三郎 普通科 四年生 広川友吉

同上 清水徳三郎 四年生 岸愛三

伊予国越智郡今治本町 三年生 広川友吉 池田知次郎

伊予国越智郡今治中浜町 二年生 檜垣寅吉 檜垣寅吉

伊予国伊予郡余戸村 三年生 末光類太郎 岡本牧夫

伊予国東宇和郡卯之町 三年生 末光類太郎 山川隆次郎

伊予国宇摩塩下柏村 一年生 鈴木達治 光藤忠太郎

伊予国東宇和郡卯之町 一年生 末光平十郎 二宮峯男

(四) 同志社英学校生徒名(明治三十年五月)

別科 神学 四年生 園田重賢 中村久熟

別科 神学 三年生 松岡正福 村上春太郎

普通科 二年生 山本静也 渡辺貴磨

普通科 五年生 吉田清太郎 末光平十郎

普通科 四年生 鈴木達治 清水伴三郎

山下寅之助 古谷久綱

古谷久綱

初期の同志社と松山のひと

|  |     |     |        |      |     |         |
|--|-----|-----|--------|------|-----|---------|
|  | 普通科 | 二年生 | 柳瀬 実次郎 | 普通科  | 一年生 | 叶世義 実   |
|  | 〃   | 〃   | 村瀬 民三郎 | 〃    | 〃   | 玉貫 忍哉   |
|  | 〃   | 〃   | 小滝 無事郎 | 〃    | 〃   | 井上 嘉太郎  |
|  | 〃   | 〃   | 長島 幾太郎 | 予備学校 |     | 日浅 章    |
|  | 〃   | 〃   | 富田 恭平  | 〃    |     | 告 森 桂   |
|  | 〃   | 〃   | 長尾 忠雄  | 〃    |     | 森田 安太郎  |
|  | 〃   | 〃   | 浦和 八郎  | 〃    |     | 宮本 治郎   |
|  | 〃   | 一年生 | 森 次太郎  | 〃    |     | 鈴木 富士太郎 |
|  | 〃   | 〃   | 越智 好次  | 〃    |     | 白石 孝哉   |
|  | 〃   | 〃   | 國松 英馬  | 〃    |     | 浦和 三郎   |
|  | 〃   | 〃   | 長尾 忠   |      |     |         |

なお、明治二三年五月の在籍記録とならんで、一八七九(明治一二)年以降の同志社英学校卒業生の名が年次ごとに記されているが、その中から愛媛県の出身者を年代別に列記すると左のようになる。

○明治一八年六月 別課神学卒業 宮川富次郎 小野 忍

○明治二一年六月 別課神学卒業 富田元資

○明治二二年六月 別課神学卒業 竹内甚吉

○明治一七年六月卒業 堀<sup>くわ</sup> 正義、村井知至、重見周吉

○明治二〇年六月卒業　松浦政泰、増田雅太郎、山田直太郎

これらの愛媛県出身の生徒たちは、明治二三年五月調の報告では、総生徒数五一八名のうち四五名を数えている。これは、地元京都府の七八名、兵庫五一名、つぎに比較的近い岡山の六七名には及ばないが、同志社と密接な関係にあった熊本の二八名、群馬二七名よりはるかに多い生徒たちが愛媛県から同志社で学んでいたことを知るのである。

さて、これらの愛媛県出身の生徒たちは、同志社でどのような生活をしていたのであるうか、彼らの交りにおいて、どういう人物が中心にあり、また、どのようなエピソードがあったのであろうか。それらをつまびらかにすることは困難であるが、最近、同志社社史資料室の河野仁昭氏の尽力で、当時の卒業生たちの回想録が出版されたので、それによって松山出身者の同志社時代の生活を追ってみよう。

初期の同志社においては、今日以上に出身の県の仲間の交りは緊密であった。多くの場合、同郷の先輩をたよって上洛し、その指導をうけ、学期中は県人の会合をひらいて励ましあい、休暇に帰郷しては、後輩に影響を与え、就職にあたって、同郷の先輩が重要な役割を果たした。

一八八三（明治一六）年に同志社に入學して武市庫太の記録をみると、松山出身の者たちの交りがえがかれている。彼は松山の変則中学で五年の課程を経ているが、英語は不十分であるということ、一年に編入し、松浦政泰と同級であった。武市は明治一六年一月四日に松本亦太郎などとともて京都第二公会で受洗している。彼は松山出身の用いた松山ことばについて、つぎのようにのべている。

松浦君や私等は何時いつも自分の郷里の松山言葉まつやまごゑを遣つかって居た。松山言葉は友人同志で用ゐる言葉でも田舎であつた。普通ならば、



「ゆかうや」と云ふのを、私共は遊びに「おいきんか」と言ふ。私共が「おいきんか」と云ふと温順に平らかに聞えるが他の人が真似ると、アクセントが此言葉と調和し無いので、非常に滑稽に面白く聞えるので、何時も他の友人達に「おいきんか」と妙な調子で真似されたものだ。

松山から同志社で学んだ人びとの中で先輩格であったのは村井知至であった。同志社時代をかえりみて同志社の三つの特色として、つぎの三つをあげている。<sup>(17)</sup>

一つは English である。同志社の English は、卒業の人々をして世ニ名をなさしめた所以である。今見る東京あたりの学校の英語をやるのと違ひ、全く教課を英語で以てやったから、自然と英語と云ふものを会得し、其れにひたる事が出来たのである。

二つには、英語と云ふものよりも思想ニ興味をもって居た。英書を読んでも、其の思想を得ると云ふ方ニ重きを置いて居た。これは演説などがあると云ふ事もあつたが、今一つは先生方の感化があつた。山崎(為徳)、大西(枕)、森田(久万人)、浮田(和民)等の方々の影響を蒙つて居た。

三には即ち spirit である。同志社の学生は各人めい／＼が日本国家を担つて立つと云ふ精神をもって居た。この精神は新島先生から来て居ると思ふ。

村井知至の同志社時代の記録で興味が深いことは、一八八一(明治一四)年の暮<sup>(18)</sup>、年が替ると徴兵令が變り、独身者は皆徴兵にとられるということがしきりに云はれたので、彼は大急ぎで松山に帰つて嫁探しをした。何分急なこと一旦話しやすんだが、先方から異議が出たりして、年末には役所も休暇になるといふので、一月二五日に挙式したといふ。<sup>(19)</sup> ちなみに村井の妻となつたのは松山の長屋忠明の娘ヨシで、彼女は当時一六才で、翌年志をたてて神戸女学校に入学した。村井はこのときの出来事を「徴兵騒ぎ」といつている。といふのは、そのときの徴兵令改正の話は風説にすぎなかつたからである。なお『七一雑報』の報告によると、長屋長明は早くからキリスト教に関心を示し、

一八七九（明治一二）年二月今治から松山に来て伝道をしたとき、松山伝道中伊勢時雄は長屋家に滞在し、今治に帰ったのちも、長屋のもとに聖書などを送付している。<sup>20</sup> さらに、松山教会の記録によると、一八八三（明治一六）年「長屋忠明氏夫人及び令嬢、菱田宅で伊勢教師より八月八日受洗」とある。<sup>21</sup> 長屋忠明は、一八九五（明治二八）年松山基督教教会一〇周年にあたって、記念事業の委員として尽力している。なお、一九〇三年の松山市役所の記録によると、松山教会堂の敷地及建物（小唐人町一丁目一二、段別三三六坪七七、地価一五八、七四〇、地租三、九六九）の持主姓名は、松山市大字二番地四十三番戸長屋忠明とあり、彼がいかに土地の有力者として教会のために寄与しているかを知ることが出来る。<sup>22</sup>

村井知至は、長年雑誌『道』に書きつづけた宗教随想を『無絃琴』と題して出版したがそれを岳父に捧げつぎのようについている。<sup>23</sup>

#### 獻呈の辞

無絃琴、無絃琴、吾が最愛の無絃琴！ 爾の音に明と潔とあらんか、爾の調に高と遠とあらんかあらば是れ上なる靈の神と下なる靈の人の賜なり。而して人の中には負ふ所最も多きを岳父忠明長屋翁とす。翁は伊豫松山の士、識高く真に是れ一個の大哲人也。唯口吃にして弁重く、為めに無名に終りたるも、その白鬢の間より諄々として説く所、正に是れ一種靈妙なる無絃琴なり。我等夫妻は銀婚式後方に七年の今日に至るまで、朝な夕な、その聲咳に接して得る所、幾何ぞや。爾、今や新装世に出づるに當り、先づ爾が共鳴の友なる翁の膝下に馳せよ。馳せて余が山高海深の原恩の万一に酬いんとする微衷を致せよ。

乙卯新緑杜鵑の日

この献辞のなかには、長年にわたる岳父長屋忠明に対する彼の尊敬と感謝の念を充分に知ることが出来る。

兒 知至謹識

初期の同志社で学んだ人びとの回顧録をよむと、松山出身の二人の人物が学生たちの世話や面倒をよくみていることがわかる。

一人は、吉田清太郎（一八六三年—一九五〇年）であり、もう一人は松浦政泰（一八六四年—一九一九年）である。

吉田清太郎については、最近成田章道氏の尽力によって、その人と思想を知る書物が出版され、同志社大学人文科学研究所で遺稿の分類・整理がなされ、やがて本格的研究がなされると思う。彼は、一八六三（文久三）年に松山で生れ、一八七五（明治八）年から四年間近藤元修（南洋）の塾に入り、漢字儒教を学び、アッキンソン松山訪問の翌年に、中国で出版されたキリスト教入門書『天道溯原』を読んで関心を深め、一八八三（明治一六）年同志社に入学した。彼の同志社入学の動機は、キリスト教を究めて宗教界で働こうというものでなく、英語を学んで工部大学に入るためであった。ところが、翌年三月に同志社でおきた大リバイバルを経験し、五月四日に京都第二公会で洗礼を受け、キリスト教を体験的に究明するようになった。

吉田清太郎は、当時の同志社では、学生たちがほとんど兄弟の面倒を見るように世話をしていたことを記し、その例として横田安止のことをあげているが、死んだ猫を食べて、山室軍平に自分の食事を供したという自らの話には全くふれていない。この点については、山室軍平は「吉田清太郎氏の事に就いて」という見出しで詳しく触れている。<sup>26</sup>さらに、松山出身の山本徳尚も「吉田氏猫を食ふ」というタイトルで記している。<sup>27</sup>かれは、また吉田清太郎が人知れず人助けをしていたことを自らの経験にてらして記述している。<sup>28</sup>

初期の同志社で学んだ回想録は多岐にわたっているが、共通してよく出てくることに三つある。一つは、新島襄の人格的感化。二つは、リバイバル（明治一七年）の経験。三つは、上加茂の運動会である。上加茂の運動会の日は一  
一月三日で、その呼びものは旗奪で約九尺（約三メートル）の竹の先きに旗を立ててそれを奪い合う。その様子はつき  
のように記されている。<sup>28</sup>

東西の軍勢は、各自シャツ、パッチ後鉢巻と云ふ扮<sup>ひ</sup>で立ちで、号令一発と共に入乱れ、押し合ひ殴<sup>なぐ</sup>り合ひ、柔道の手を出す者、角士の手を出す者、力任せにする者等あり、四辺構はず殆んど掻き奪る様である。或時私はシャツ二枚とズボン下を履いて居たが、勝敗を決した後、気が付いて見ると、何時の間にシャツもズボン下も取られたのか全く赤裸々に為<sup>な</sup>れて居た。唯殖えたものは、人を力任せに殴<sup>なぐ</sup>ったので、右の腕に腫れを作<sup>な</sup>へて居ただけであった。

斯様に激戦であるが、一度勝負が決すると光風晴月の如く、互ひに旧の通り睦く打語った。其凶柄は何処の学校にも見る事の出来無い、独同志社の特徴として誇る事の出来る点である。

上賀茂運動会の旗奪いはすさまじい運動で宣教師たちはあまりの乱暴であることを憂い、D・W・ラーネッド（D・W・Learned）などは、それを止めさせるために兵式体操を教えたりした。旗奪いで一番辛い役は、旗持ちであった。旗取りにやってくる相手方のつわものに、撃たれ、殴<sup>なぐ</sup>打<sup>なぐ</sup>られ、蹴<sup>か</sup>られ、あらゆる酷い目にあっても決して旗を離さないという役割である。卒業生たちの回想によると二人の学生が至難の旗取りを果していた。一人は、柏木義円であ  
り、もう一人は、松山出身の松浦政泰であった。

松尾音次郎はつぎのようにのべている。<sup>29</sup>

上加茂の運動会は、私共の時二初めてやったので、私は餓鬼大将であった。いつも（もとの）天長節十一月三日にする事にな  
って居た。

其中二旗うばひと云ふがある。この旗うばひで、松浦政泰氏二就て覚えて居る事がある。一体、松浦君はふだん音なし  
い方で、運動会でも余り働かない。処が或る時に、旗持ちになった処が中々に強くて他の人が行って奪はふとし随分非道く懸っ  
ても、中々離さないで皆な驚ろいた事がある。力も強いのであろうが、斯云ふ場合に中々はなさない。

松浦政泰の人柄をあらわしているエピソードであると思う。

松浦政泰は、同志社で学んだ人びとの回想録である『同志社ローマンス』（警醒社、一九一八年刊）の編集であり、  
そこには初期の同志社で学んだ四六人の男生徒、一五名の女生徒の想い出を綴ったもので初期の同志社教育を知る重  
要な資料となっている。彼は、その自序で、「事実をして事実を語らしめよ」といって、自らに編集者に徹し、自分  
の回想は入れていない。彼は、一八六四年に松山に生れ、同志社で学び、その後、女子教育に使命を覚え、同志社女  
学校の教頭、日本女子大学の教授などをつとめ、一九一九（大正八）年一月一三日に永眠した。

松山出身の後輩、山徳本尚は、松浦政泰が同志社の在学中に学友たちをよく助けたことをつぎのようにのべている。  
同志社は宗教学校だけあって、他校に見られない善い特色を持って居った。学資に窮した友人を救ったと云ふ奇徳な人が沢山  
あった。松浦（政泰）君等も其一人で、氏の世話になった人達が少なくない。現に私や、私の従弟なども助けられた一人である。  
この点においても、吉田清太郎と共通しているところがある。

さきにあげた同志社で学んでいた松山出身者の明治二二年のリストには、西村清雄（一八七一年—一九七三年）の名  
がある。彼は、日本人の作った讚美歌の中で最も広く愛唱されている讚美歌の一つである「山路越えて」（現行讚美歌  
四〇四番）の作詞者として有名である。西村清雄は、一八七一年（明治四）年に松山市北京町に生れ、一八八五年一四才  
のとき松山のカトリック教会で洗礼をうけ、同年松山中学に入学したが、同校が廃校となり、一八八八年に同志社英

学校に入学した。同年同志社を退学し、大阪に赴き宮川経輝の薫陶をうけ、一八八九年大阪教会に入会した。その後一八九一年よりジャドソン女史が創設して普通夜学会（のちの松山夜学校）の教師となり、困難のなかに寄宿舎を設け、授産所を作り、ジャドソン女史をたすけて、学校の運営にあたった。一九三八年、松山夜学校が財団法人松山学院となり、文部大臣指定の夜間中学校を經營するようになり、西村清雄はその校長として尽力、戦後は、一九四七年に屋間の新制中学校を、一九四九年には全日制高校（松山城南高等学校）を併設し、一九五三年二神喜十が校長となるまで、校長として青少年教育に貢献した。

### 松山バンドの人びと

松山教会の一九一七年の記録には、松山バンドについてつぎのように記されている。<sup>92</sup>

その頃、松山出身の神学生は七名（今井新太郎、二宮源兵、林半、重松証太郎、二神喜十、魚木忠一及び平岡徳次郎）で全学生の一割を占めていた。このように多数の神学生を送る松山（松山夜学校と松山教会）とはどんな処か、ある宣教師は視察見学に来松した程であった。

彼らは、そのグループを松山バンドと称し、クラーク博士を中心とする札幌バンド、ジェーンズ大尉の熊本バンドにならって大いに信仰の研鑽と学究に精励していた。

本稿は主として、初期の同志社と松山の人びととの関係を扱ったもので、これらの松山バンドと呼ばれる人びとについては、稿を改めて叙述すべきものと思うが、何れも近代日本の教育、伝道に貢献をした人びとである。今井新太郎（一八九一年—一九六八年）は、松山に生れ、松山夜学校を卒業後同志社で学び、一九一八年卒業後郡中教会、西陣教会の牧会を担当し、一九二二年に接手札をうけ、金沢教会及福井教会の牧会に携ったのち、一九三九年より東京家庭学校第三代校長に就任、一九六八年永眠するまで戦中、戦後の困難な時代に恵まれない子供たちの育成にあたっ

た。

二宮源兵（一八九六年—一九七四年）は松山に生れ、松山夜学校を経て、同志社大学神学部で学び、一九二一年卒業後、女子教育に使命を覚え、神戸女学院中高部長、東雲女子短期大学初代学長などをつとめた。

重松征太郎（一八九六年生れ）は松山に生れ、一九二一年に、同志社大学神学部を卒業し、浪花教会伝道師となり、一九二三年から三年間、熊本教会の牧会にあたり、この間、一九二五年に按手礼をうけ、のち、ハワイに渡り、ハワイの日系組合教会の牧会伝道にあたった。二神喜十（一八九〇年—一九八一年）は松山に生れ、幼名を喜十兵衛といい、のち喜十と改めた。松山夜学校から同志社にすすみ、一九二三年卒業後、彦根教会で牧会伝道にあたり、松山に戻り、郡中教会をたすけ、一九五三年から一九五七年まで松山城南高等学校長をつとめ、隠退後、松山古町教会牧師となり、一九六一年には按手礼をうけ、一九六八年会堂建築の事業を果し、一九七〇年まで同教会の牧会を担当し、その後は同教会名誉牧師となり、小松教会、天山伝道所の応援、松山刑務所教誨師などをつとめ、地方におけるキリスト教の教化活動に尽力した。

魚木忠一（一八九二年—一九五四年）は松山に生れ、松山夜学校に学び、卒業後二年間、松山で教師をつとめたのち、同志社大学神学部に入學し、一九二二年に同志社大学神学部を卒業した。卒業後直ちに渡米、シカゴ大学を経て、ユニオン神学校、コロンビア大学で研鑽をつみ、帰途ドイツのマーブルグ大学で半年間学んで、一九二七年に帰国し、同志社大学文学部神学科の講師となり、一九三〇年くらい、教授として、宗教改革以降の近代のキリスト教精神史を専攻し、かつ、日本のキリスト教の精神的伝統について研究をすすめていた。一九五四年七月から同志社大学神学部長となり重責を果しつつあったが、同年一月一〇日脳出血のため急逝した。

平岡徳次郎（一八八六年—一九五九年）は、松山の生れではないが、松山バンドのなかに名をつらねている。彼について、友人二神喜十はつぎのようにのべている。<sup>33</sup>

平岡牧師は、大阪出身で、ある貯蓄銀行「大阪貯蓄銀行」に務め、支店長級の人であったが、キリストに救われ教会に入った。生来病弱の身であったので同志社での勉強に堪える体力の養成のため和歌山転地を考えていたところ、沢村重雄牧師の奨めに従って松山に來り松山夜学校舎の宿舎に身を寄せたのが、松山教会との縁の始まりであった。こういういきさつで、牧師招聘の話が出た時、一も二もなく平岡氏に決まった。

平岡徳次郎は、一九一九年同志社大学神学部を卒業すると同時に松山教会の招きをうけて赴任し、一九二〇年按手礼をうけ、一九二五年より約一年半、米国において留学をなし、一九三七年まで松山教会の教会伝道にあたった。のち、天満教会牧師として尽力した。

やや年代が異なるが、同志社で学んだ松山出身の教職者として野本教男（一九〇九年—一九八五年）に触れておきたい。彼は、松山に生れ、松山城南高等小学校に学び、一九二七年松山教会において今井新太郎より洗礼をうけた。同志社にすすみ、一九三三年、同志社専門学校神学部を卒業し、岡山教会、および高梁教会の教会にあたり、一九三七年には按手礼をうけ、一九四〇年から宇都宮教会牧師ならびに清愛幼稚園長に就任し、一九八一年に引退するまで四年間同教会の牧会にあたった。この間、戦後の困難な時代に、一九四六年から五一年まで日本基督教団社会部主事として、さらに、一九五四年から六期一二年間日本基督教団社会委員会委員長をつとめ、教会の社会的奉仕の促進に尽力した。なお、宇都宮においては保護司、刑務所宗教教誨師、家庭裁判所家事調停委員、社会教育委員などをつとめ、地域社会の福祉、教育などに奉仕した。

さきにのべたように重松稗太郎は、同志社大学神学部を、一九二二（大正一〇）年に卒業し、また、かねてから海外



伝道を志し、シアトルで牧会をしたのち、一九五三年からクワイ島の組合教会の日語部牧師として、コロア(Koloa)リフエ(Lihue)そしてカパア(Kapaa)などの教会において、一九八四年に八八才で引退するまで働いた。(The Friend, Vol XXXVII No1, January 1985)

なお重松の著作に『私の同志社生活』(加睦教報社、一九六一年)という作品がある。これは、手書きの謄写印刷で、二段にわたって、一七三頁あるもので、彼の同志社時代の想い出を松山の旧友たちに書きおくるという形式をとった記録である。裏扉には「七十二才にて接手札をうけられし、二神喜十牧師及び世界一周の帰途御来布の二宮源兵衛長にお祝ひの印としてこの書を献げます。古き友人なる重松征太郎より」と記されている。

全体はつぎの六章に分れ、それぞれ彼の親しい人びとに想い出を語る形で書かれている。なお、序文は、同じく同志社に学びホノルルのヌアヌ教会で牧師をつとめた原忠雄が誌している。

重松征太郎『私の同志社生活』目次

|                    |            |
|--------------------|------------|
| 序文                 | 頁          |
| 一、同志社に入學した頃の話…………… | (アブラハムへ) 一 |
| 二、予科生時代の思出……………    | (今井兄へ) 一八  |
| 三、本科一年生の頃……………     | (平岡兄へ) 四九  |
| 四、本科二年生の頃……………     | (魚木兄へ) 八三  |
| 五、本科三年生の頃……………     | (二宮兄へ) 一一五 |
| 六、神学生時代を回想して……………  | (二神兄へ) 一五三 |

右の宛先に記されている人びとは、第一章のアブラハムへは彼の家族に宛たもので、その他はすべて松山に關係した親しい人びとである。すなわち、目次の第二章の「今井兄へ」というのは、彼が一九一五年に同志社に入学したときに、四年生として世話をしてくれた今井新太郎のことであり、第三章の宛先きとなつてゐる平岡兄というのは、天満教会の牧師をつとめた平岡徳次郎のことで、実業に携つていたため彼は、今井新太郎より五歳、重松より一〇歳年上であつたので、重松は「平岡さん」と呼んで本科一年のときの想い出を綴つてゐる。当時の同志社の状況、とりわけ、原田社長時代の同志社の紛擾が学生の立場からえがかれてゐる。第三章の宛名書きには、「元同志社大学神学部長、神学博士、魚木忠一兄にかく、本科二年生の頃」と記されており、彼と魚木忠一との松山時代からの關係が記されてゐる。魚木の家は松山の千船町にあり、重松の家は港町で、近い距離であり、松山夜学校でも、大街道教会（松山教会）でも一緒であつた。年令は、魚木の方が四歳年上であつたが、同志社に來たのは、重松が一年先きであつたことなどが記されてゐる。当時（大正八年）同志社でホイットマンについて講義をした有島武郎のことや、のちに慶応に移つて哲学担当の島原逸三教授が学生たちと柔道をして錬えたことなどが回想されてゐる。

第四章は、原田助が去つて、海老名暉正が総長に就任した時代（本科三年）の記録で、彼と一緒に同志社に入学した二宮源兵に宛られてゐる。新総長を迎えた同志社の状況、東京における世界日曜学校大会、「オーガスタンの懺悔録に関する研究」と題する卒業論文のことから、浪花教会への就職決定までの想い出が記されてゐる。最後の章「神学生時代を回想して」において、彼は少年のころから同志社卒業までの日々を省みてまとめてゐる。本章が宛られてゐる二神喜十は今井、平岡、魚木、二宮と共に著者の松山時代からの親しい友人の一人であり、どうしても欠かせない人として最後の章を彼に宛ててゐる。重松は、松山夜学校の関係者の中から同志社に学んだ人びとに三つの波のあつ

たことを記し、第一波は、重松と同時代者であり、本書の宛先きとなっている人びと、第二波は、入江、松浦、浜田、坂本などの人びと、そして第三波は、しばらく後の野本、関岡、浅倉という人びとの名をあげているのは、興味深いことであり、今後の松山研究に示唆を与えるものとして注目したい。いづれにしても、本書は、オーガスチヌスの懺悔録にあやかって、自らの青年時代をふりかえって、回想録を親しい友人への書簡という形で淡々と綴ったものとして、興味深い記録であり、当時の同志社の状況を知る上においても、きわめて貴重な資料であるといえよう。

なお、本書の裏表紙には「見よ、時間は日毎に來り、また過ぎざりて、我にもろくの希望ともろくの記憶とを播き、徐ろにわが過ぎにし美の喜悅を新にす」というオーガスチヌスの懺悔録の一節(四の八・一三)が記されている。

### 三 松山のキリスト者の性格

われわれは、主として初期の同志社で学んだ松山の人びとをあげ、現存資料を通してそれらの人びとの体験や働きを辿ってみた。さらにそれらの先人たちについて、同志社で学び一時は「松山バンド」とよばれた人びとについて多少触れるときをもった。人間は、それぞれの地域における風土的影響をうけているものであり、その風土的影響は単に、地理的、自然的要素から成っているものでなく、文化的、精神的、社会的側面をもっている。聖書の教説は、普適的であり、根源的に同一であるが、それが受けいられる地域において、異った応答がなされ、その地域の風土的環境やそれに結びついた文化的、歴史的伝統の影響をうけて独特な性格が形成されるものである。松山地方の精神的、文化的風土において、福音の種がまかれたとき、その成長と結熟過程において、われわれはどのような特色を見

出すのであろうか、それは他の地域——たとえば、熊本の場合や、土佐の場合と比較してどうという特色をもっているであろうか、これらは、興味深い比較研究の課題である。いまその手がかりとしてわたしは、つぎの五つの点をあげて今後の研究の参考に供したい。

### (1) 靈性の涵養

松山出身者で同志社に学んだ村井知至は、高松、今治などで伝道師をつとめ、本郷教会の牧会を担当し(一八八九年)、留学後一八九三年には、日本組合基督教会の按手札をうけたが、のちにユニテリアンとなった自由主義者として知られている。しかし、彼は、ユニテリアンが理性や倫理性を強調するのに対し「宗教は哲学や倫理を超越した別世界、即ち神秘の境に其存在を有するのである」<sup>84</sup>とのべて、宗教の基盤に超越的なものの直覚、靈感、感得のあることを力説している。彼は「この種の経験と意識を有せずして宗教を喋々するのは、たわいない愚人の寝言である」とまで述べ、宗教的体験の重要性を指摘している。さらに村井は、「神秘的なき宗教は空名也、然り合理的宗教といひ、倫理的宗教といひ、或は又社会的宗教といふ、其名は美なりと雖も是皆宗教の本領を没したるもの」とのべている。彼は、靈性の尊厳を信じ、天聲、靈聲を感得する人心の涵養につとめた。この点において、晩年の村井はユニテリアンではなく、靈的な宗教思想家であったと言えよう。

松山出身のキリスト者には、靈的体験を重んじるものが少くなかった。魚木忠一は、神と人間の出あいの契機を「啓示思慕的直観」ととらえ、永遠と時間の邂逅を「觸発」として表現したが、これも、超越的な存在に感応する人間の靈性の働きをあらわしたものである。<sup>86</sup>

靈性の涵養という点において最も徹底して追求した人は、吉田清太郎である。彼は、同志社を卒業し、松山女学校

で働き、佐賀県鹿島鎔造館で舎監兼教師として働いたのち、一八九七年より、再び松山女学校で働いていたとき、聖霊の体験を深めた。それまでも彼は日夜献身犠牲の生活を送り、祈りながらあるときは断食をしてあたった仕事が残らぬようまじめにやっていた。そのとき同志社からJ・D・デイヴィス(J. D. Davis)が松山に来て「聖霊に満たされる」と語ったのをきき、自らの身に聖霊を受けた体験のないのを悟り、体験を深めて行った。その後、東京から松山に講演に来た吉岡弘教が「聖霊に満たされんと欲せば、先づ本心に背く勿れ」とのべたのに励まされ、自己の本心を開いて聖書を受けることを生涯にわたってつとめた。彼が、天龍寺の巖山和尚を訪ねて参禅したのもキリスト教の祈りの体験を深めるためであった。<sup>(47)</sup> 吉田清太郎は「あなたがたは神の宮である」(コリント第一、三ノ一六)という言葉をうけいれ、自己の身体を聖霊を宿す宮となるよう不断の修練をつづけた。<sup>(48)</sup> 松山のキリスト者たちは、祈りによる聖霊の働きを大切にし、その伝統は、榎本保郎牧師の「ちいろば」の体験へとうけつがれているといつてよい。<sup>(49)</sup>

(2) 日本の文化を通して

松山は古くから宗教心のさかんなところであり、かつ正岡子規、内藤鳴雪、高浜虚子などの俳人を輩出した文化的土壌であり、そこで形成され、表現されたキリスト教信仰には文化的香りがあった。<sup>(40)</sup> キリスト教を理性的教説としてうけられるよりも、あるいは倫理的徳目とするのではなく、むしろ、自己の心情に福音の響き<sup>(50)</sup>を反響させて、その信仰体験を詩歌として表明し、日本の文化的感受性をもって福音に応答するようにつとめた。

村井知至は、「宗教に感ずべきものにして論ずべきものにあらず、又行ふべきものにもあらず、宗教は一種の美感

である。感じ、興ずる所に宗教は生きて居るのである」<sup>(4)</sup>とのべ、自ら、蛙人と称した。彼の雅号の一つの由来は彼、が、幼時に父と母をなくし、天涯孤独の身であったが尊敬していた曾祖父、村井知衡が蛙を愛し、庭中に沢山蛙を養っていたことにある。もう一つの由来について彼はつぎのようにのべている。<sup>(5)</sup>

我曾て某処に避暑す。巷の俗衆に倦きたる我は、静かに閑寂の田園を味はんとせるなり。然るに宿の女将、我つれどくなるべきを思ひて、暇ある毎に来て喋々として語って止まず、我遂にこれに堪ふる能はず、常に杖を引きて野に出でたり。一夕即ちまた難を避く。蛙を伝ひ、小徑を辿れば蛙聲しきりに耳に迫る。感興つきざるものあり、生れて始めて句を作る。

倦きくゝて蛙に知己を求めけり

と。此時雅号を定めんことを思ひ、曾祖父を偲びて、即ち蛙人となせり。

村井知至は、宗教学、神学、英語学を究めた人であったが、広い教養と多趣味をもった風流人で、その著作『閃光録』(一九三九年刊)は、旧著『無弦琴』(一九一五年刊)を修補訂正して出したもので、欧米のキリスト教ではなく、日本人としての文化的感受性をもって表明した宗教隨筆としてきわめて興味深いものである。彼はこれを英訳し、邦文版と英文版の二冊を同時に出版している。なお、彼の晩年の著述に『肚』<sup>(はら)</sup>(一九四一年刊)という小著がある。その中で『肚と健康』、『肚と芸術』、『肚と修養』、『肚と宗教』などにわたって論及している。日本人が崇拜する人物は、肚の人であり、日本の芸術は手先の藝術ではなく、無言の中に人を動かす腹藝であり、講談、義太夫、浄瑠璃、浪花節、そして歌舞伎、能に至るまですべて腹芸であることを指摘している。宗教においても、頭の宗教は理屈の宗教であり、胸式宗教は、倫理的徳性を修めようとし、肚の宗教は、肚のドン底に徹して、最も深淵において生命を得る最高のものとしている。この外、村井知至には『雄弁の修練』(一九一五年)、『三S健康法』(一九三四年)など広い領域にわたった著作がある。

晩年に、村井知至が特定の宗教にこだわらずに、広く宗教的体験を重んじ、かつ人間自身のなかに超越的なものを体得することを求め、「予は超人たらんことを希ふ<sup>(43)</sup>」といい、「内に神あり<sup>(44)</sup>」として、自己のうちに神の存在をみようとしたとき、日本の文化との接触が主観的なものとなり、国家主義的な潮流が強くなってきたときに、それに対する批判的な視点を与える超越的基盤を稀薄にしていたことを指摘しておく必要がある。宗教と文化の接触に結合において重要な課題がそこにあるように思われる。

松山のキリスト者たちが自らの信仰を詩歌、俳句などを通して随時表現した代表的な例として、西村清雄の讚美歌『山路越えて』(四〇四番)をあげることが出来る。一見、この讚美歌は、おだやかな伊予の山野を旅した信仰の歌のように思われるが、このうたを作られた状況を調べてみると決して安らかな旅路のなかから生れたものではない。このうたは、一九〇三(明治三六)年に、当時宇和島で伝道していたミス・ジャドソンを訪ねて約二週間その伝道を助けてその帰途につくられたものである。宇和島から松山への道のりは、約一〇〇キロあり二つの峠を越えてゆかねばならない。時は春なお寒い二月の上旬で、高い山の頂には残雪があった。第二の峠、鳥坂峠に差しかかったときは薄暮のころであった。とぼとぼと山路を辿るうちに、やがて日は全く暮れて真暗の山道を僅かに梢をもれる星あかりで、独り淋しく木の根や岩角につまづきながら歩みをつづけた。足の疲れは増すし、いつ目的地につくのかも心もとない不安なひとり旅であった<sup>(45)</sup>。

西村清雄が『山路越えて』の歌詞をつくったとき、三二才であった。その少し前には、彼は、松山夜学校の仕事に打ちこんで来たために、心身に疲労を覚し、休養して同志社でしばらく学ぶことを考えていた<sup>(46)</sup>。おそらくその前後は、西村清雄にとっては苦難の時代であった。一八九五(明治二八)年にはジャドソン女史の帰米のため校務一切を引

き受け、女生徒のために授業場を作り、とうもろこしを食して飢をしのぎ、生活費を得るため職工となって働き、翌年には、工場閉鎖、寄宿舎解放をなし、翌一八九七年には、耕織を再開、寄宿舎も再び開かれるようになり、彼自身も金藤ハマノと結婚し希望をもったが、一九〇一年には、過労のため夫人が体をこわして倒れ、松山女学校の方も二宮邦次郎が校長を辞任するなどして、彼の上にはますます重荷がかかってきていた。頼みとしていたジャドソン女史は、一八九八年に帰松したが、伝道のため宇和島に赴くことになった。この讚美歌が作られた一九〇三年の二月に、ジャドソンは宇和島から米国に帰っている。西村の宇和島ゆきは、暫く帰米するジャドソンに別れをつけ、かつ将来の働きについて相談する意味をもっていったものと思われる。こうしてみると、あの讚美歌が、宇和島からの帰りの不安な夜道の困難なひとり旅のなかで綴られた信仰のうたであったことが理解される。

先述のように松山には、正岡子規をはじめ内藤鳴雪、高浜虚子などの俳人を出した文化的風土があり、その影響をうけて、松山のキリスト者のなかには俳句をたのしみ、日常の喜びや悲しみを句を通して表現する風情をもつ人びとが少くなかった。松山バンドの一人である今井新太郎が、その句帖に書きとどめていた句のなから数首をひろって書きとどめておく。

薫風や学寮の窓富士をおく

秋雨の音なき音や旅杖

秋の山雲沈ませて暮れにけり



青葉あざずく上野の森に星うすく

谷川に夕影落ちぬ河鹿鳴く

湘南の山なだらかに蜜柑咲く

純白の幕に野点や梅匂う

虫捕りや親子揃って蘆花の園

歳晚や校祖墓前に供華捧げ

受難うぜん過あむかえて野辺によめな摘む

おそらく日本のプロテスタント神学者のなかで、日本の精神的伝統を生かして、神学的考察を志向した最初の神学者は魚木忠一であったといっても過言ではあるまい。彼は、地道に堅実に基督教思想史を研究し、とりわけ、宗教改革者たちの精神を把握するようにつとめた。その主著の一つである『基督教精神史研究』(一九四八年)<sup>48</sup>はわが国におけるカルヴァン研究のなかでも基本的な労作の一つである。さらに彼は、ユニオン神学校における研鑽ののち、ヨーロッパに暫く滞在し、一九二七年に帰国し、いち早くわが国にバルト神学を紹介している。魚木はこうした背景から自由主義的神学の視点ではなく、聖書に証しされた啓示を中心として、福音と日本文化の触発を考察した。彼は主として歴史的手法を用いて、日本の精神的伝統を受け継いで日本人がキリスト教の福音をいかに受容したかを検討した。その研究がまとめられたものが『日本基督教の精神的伝統』<sup>49</sup>である。本書は、地道な労作であるが、今日においてもきわめて示唆をもつものである。さらに、彼は隠れた地方のキリスト者の生涯に関心をもち、詩、書、画に達熟

した牧師、木月道人こと難波宣太郎（一八六五—一九四五）の伝記をまとめ『木月遺稿』<sup>(6)</sup>として刊行している。彼に自由な執筆の歳月を与えたならば、さらに、日本の精神的伝統と基督教の触発を神学的に開花結実させたものと思う。一九五四年二月一〇日、公務多事過労のため、脳出血によって六二才の生涯を終えたとは、惜しみてもあまりあることである。

### (3) 福音による人間形成

多様にわたるキリスト者の聖務<sup>ミニステリー</sup>において、ある人は、説教に、ある人は、社会奉仕に、ある人は、教育に、そして、ある人は霊的な働きにそれぞれの賜物を生かして特色のある働きをすることを聖書は教えている。（エペソ四—一—三）松山のキリスト者の働きも多岐にわたっており、一概にのべることは出来ないが、彼らの中には、教育者としての性格が共通しているように思われる。もちろん、彼らのすべてが制度的な教育機関で働いたわけではなかった。中には吉田清太郎のように、千駄木教会という小さな群の牧師として後半生を送った人もあった。しかし、彼の前半生においては、再三松山女学校の教師をつとめ、佐賀県鹿島鍛造館でも、舎監兼数学教師をつとめ教育に尽力した。さらに、彼は牧会にあたって、対話を重んじ、一人ひとりの魂を追い求め、それぞれの人間形成を主眼としていた。彼は、キリスト教を愛の宗教としてとらえ、それは「愛を、生活や行動の目標として進む」宗教であるとし、自らの日常生活においてその実践につとめた。ちなみに、千駄木教会規則の第一条には、目的が「つぎのように記されている」<sup>(6)</sup>。

#### 第一条 目的

信者をしてキリスト化せしむるに在り

(説明)

若し信者にして、イエスの根本信念なる「我は父にすみ、我と父とは一なり」(ヨハネ一四・一〇)との信念を体得し、其の生活がイエスと一致するに至れば、其の人は既にクリスト化した者と認めらるるなり。

仮にかくの如き人物を三十年を費し、僅かに三人得たりとする。其の三人が又三十年を費し、三人のクリスト化したる人物を得るとし、之を繰り返し、六百年の眺に至るとせば、三百億のクリスト化したる人物が、同時に其の社会に活躍するに至らむ。

我と父とは一つであるという信念に基づいて、地道な牧会を通して、六〇〇年の将来をのぞんで、キリストにある人間形成を目的としたことがうかがえる。

さきへのべたように、村井知至は、同志社を卒業後四国、九州において牧会、伝道にあたり、日本組合基督教会の接手札をうけ、本郷教会の牧師をつとめたり、また、わが国最初の社会主義研究会の会長をつとめたりして、多方面な働きをしたが、一八九七年に帰国してからは、教育界に入り、英語の教師として生涯をすごした。彼は教育家としての五つの類型に分けて論じている。<sup>(59)</sup>

第一は特に教育に興味あるに非ず、さりとて格別に野心あるにも非ず、たゞ年々歳々自己に課せられたる業務を無意味に繰返す人にして、直言すれば麴麴<sup>まがまが</sup>の爲めに餘儀なく教師たるものに過ぎず、若し麴麴にして豊かならんには、退いて楽隠居たることを欲す可し。

第二は後生大事に自己の地位に戀着し、巧言と令色とを以て校長の意を迎へ、寛大と丁寧とを以て生徒の歡心を買ひ、謹直と体裁とを以て世間の信用を博し、如何にもして地位と俸給との昇進を圖らんと努むる人にして、その求むる所は偏へに一身の名利に在り。

第三は学問を学問として愛する篤学の教師なり(中略)彼に於て学問は決して方便にあらずして、直ちに目的其ものなり、彼は生れながらの学者にして、且自ら之を意識せり、されば世上の富貴に心を動かす事なく友の榮達を見て羨む事なし、彼は自ら一個の学者たるに安んじ、且学者たるを誇りとするなり。

第四は即ち教育を愛する教師なり、彼は其の生徒を視ること猶ほ己れの子の如し、その学力の進歩を以て無上の樂みとなし、之が為には如何なる勞をも厭はざるなり。

(中略)

第五は、即ち学生を人間として教育する事を以て自己の本領と信する教師なり、彼は文字を教ゆるを以て足れりとせず、文字ならざるものを教へんとするなり、彼は斯くする事によりて、学生をして一個の人間たらしめず息まざるなり。

ラスキンを敬慕するものなり、彼は偉大なる文豪なり、また偉大なる芸術家なり。然れども彼の眞の偉大は決して茲に存するに非ざるなり、彼の大本領は、その偉大なる精神的教育家たりし点に在り。

村井知至が人間形成を志す教育家をめざしたのは、ラスキンに範をとった点もあったと思うが、彼が自伝にのべているように、同志社在学中に新島襄から受けた影響によるものであることは明白である。

#### (4) 女子教育への情熱

松山においては、キリスト教がまだ充分認められていなかったときに、そして教会が設立されて間もなく、まだ充分な力を貯えていなかったとき、いち早く一八八六(明治一九)年にキリスト教主義を基盤として松山女学校を創設した。たしかに当時においては、欧化主義の時代の影響をうけて女学校が各地に設立された。高知においても、一八八七(明治二〇)年に高知英和女学校が英人スターリング女史によって設立されている。同女学校の背後には、板垣退助、片岡健吉、大脇順若などの土地の有力者が後援を惜しまなかったことがある。しかし、松山にはさしたる政治的支援はなく、むしろ幾多の試練にあいながら今日松山東雲学園が百年の歴史を経て存在している。欧化主義の時代のつぎに来た反動期において各地のキリスト教主義学校が困難に遭遇し、なかには廃校を余儀なくさせられた。その後、国家主義の時代においても松山女学校はその働きを続けることが出来た。それには、二宮邦次郎を中心として、

吉田清太郎、増田シズ、安永コト、尾藤スズなどの人びとが教師をつとめ、アメリカン・ボード派遣の宣教師たちと協力して女学校の教育にあたり、東正信、長屋忠明、杉浦忠直、村井信大、喜多川久徴、杉浦ミツ、同シゲ、福見オリエ、朝山モノなどの信徒たちが、教会の役員として、あるいは女学校の理事として尽力した働きがあったことを忘れてはならない。

松山から同志社で学び、女子教育の領域で顕著な働きをした人として、松浦政泰を挙げておく必要がある。松浦は、明治の反動期にあたって同志社が内外に苦境に立ったとき、同志社女学校の教頭としてその運営を支えた人であり、同志社の女子教育の恩人として考えられている。<sup>55</sup> 彼は、女子教育には五つのHの字が大切であるとし、つぎの五つをあげている。

(1) Heaven (2) Heart (3) Head (4) Hand (5) Health

さらに同志社女学校の特質として、つぎの三点を指摘している。<sup>56</sup> そこに同志社の女子教育についての彼の見識をみることが出来る。

#### 同志社女学校の特質

- 一、同志社女学校は故新島先生の遺業なり。明潔なる先生の精神<sup>いんくす</sup>幾許か校内に磅礴<sup>ほうぼう</sup>たらん、信仰に於て主義に於て、我校は幾分か他とその趣<sup>おもむき</sup>を異にするものあらん。
- 二、我校の生徒は概して温和なり柔順なり。他基督教女学校に比して遙に此点に秀つ。
- 三、風儀の質素なるは、聊か我校の特色として世に誇る所なり。……人は我校の皮相を見て男か女かと笑い、我校は飽迄此特色を存せんと欲するなり。

この外、松山出身で同志社に学び、女子教育に貢献した人として、西村清雄、二宮源兵をあげることが出来よう。

## (5) 忍従の同労者

人間の性格は風土的環境に影響されるところが少くない。松山は瀬戸内海に面した風光明媚の土地で、温和な気候を反映して、比較的温厚な人物を輩出してきた。太平洋の黒潮に面した土佐にみられるはげしさはなく、雄壮な阿蘇を背にした熊本のような荒々しさはない。さらに、カラッ風の吹きすさむ上州のような凛々しさとも異なる。

熊本バンドの人びとは、日本組合基督教会の流れにおいて主役的役割を果していた。海老名弾正や宮川輝輝は大向うをうならせるような小説作家であった。松山の人びとは、もっと地味な話し方をし、華やかさは欠けていたかも知れないが渋い味わいをもっていた。小崎弘道は、やや訥弁で、海老名や宮川のような雄弁ではなかったが、組合教会のみでなく、諸教会の会議でも議長役をつとめ、基督教界を代表する指導者であった。いづれにしても、熊本バンドの人びとは、それぞれ個性があったが、主役的存在であった。彼らは、天下国家を論ずる気概にあふれ、その特色を生かして、リーダーシップをとる気骨をもっていた。

それに比するならば、本稿で扱った松山のキリスト者たちは、温和な性格をもち、物事にひかえめであり、地味であった。彼らは、苦難を共に負い、辛棒がよく、自分のおかれた立場を守り、ワキ役に徹して、自分の責任を果す姿勢をもっていた。長くジャドソン宣教師を助けた西村清雄、二七才で同志社女学校の教頭に就任し一年間、同志社女学校の再建、維持のために、地道な働きをつづけた松浦政泰、神学部長大下角一をたすけ、細いところにまで学生の指導をなし、漸く部長に就任して間もなく逝去した魚木忠一の場合など、それぞれの状況は異なっているが、忍耐づよい地味な協同者としての姿勢は共通していた。彼らが、それぞれの状況のなかで、地味な、そして温厚な姿勢をもって、同時代の人たちと共に辛棒よく働いた「忍従の同労者」であったというところに、その性格を見ることが

出来よう。

註

- (1) 西村拓「愛媛のキリスト教」愛媛県史編纂委員会『愛媛県史』学問、宗教編、一九八五年
- (2) 高尾哲「J・L・アトキンソン博士による最初の四国伝道」『松山東雲短期大学研究編集』第一四巻、一九八三年二月、および、日本基督教団松山教会『松山教会百年史稿』一九八六年、一三頁―三八頁
- (3) 『松山教会百年史稿』二二五頁
- (4) 今泉真幸編『天上之友』上巻、一七頁以下。なお、押川方義については大塚榮三編『聖雄押川方義』、押川先生文書刊行会、一九三二年を参照
- (5) 村井知至『蛙の一生』警醒社、一九二七年
- (6) 同上書、四〇―四二頁
- (7) 村井知至『社会主義』労働新聞社、一八九七年
- (8) 杉井六郎『遊行する牧者、辻密太郎の生涯』一九八五年、四五五頁―四五六頁、村井の健康法については『体験三S健康法』北文館、一九三四年を参照
- (9) 『信仰三十年基督者列伝』警醒社、一九二二年、九三頁、以下『列伝』
- (10) 『松山教会百年史稿』四一頁―四二頁
- (11) 『列伝』二九五頁
- (12) 同上書、一五九頁
- (13) 『列伝』一八八頁
- (14) 同志社社史資料室編『創設期の同志社―卒業生たちの回想録―』一九八六年、以下『回想録』
- (15) 『京都第二公会姓名録』
- (16) 『回想録』一三六頁

- (17) 前出書、二九一頁―二九二頁。なお、村井知至は「母校の賜物」という小文で、同志社時代を回想して同様のことをのべている。村井知至『無弦琴』、四方堂書店、一九一五年、六三頁―六四頁
- (18) 村井知至は前記の『回想録』でこのときを「明治二年の二月頃」としているが、彼の自伝『蛙の一生』によると、彼は「普通科三年級に編入された」とあり、村井が当時五年制であった同志社普通科を一八八四年六月に卒業していること、ならびに『回想録』にある同時代者の証言などから考えると、彼の入学は一八八一（明治一四）年九月と考えられる。
- (19) 『回想録』二八八頁
- (20) 『七一雑報』第五卷第八号、明治十三年二月一〇日
- (21) 『松山教会百年史稿』四三頁―四四頁
- (22) 同上書、九七頁
- (23) 村井知至『無弦琴』四方堂書店、一九一三年
- (24) E・N・(成田章道)編『我と父とは一なり』（吉田清太郎先生没後三十周年記念）一日会、一九八〇年
- (25) 『回想録』二三八頁―二三九頁
- (26) 前掲書、五九頁
- (27) 前掲書、六〇頁
- (28) 前掲書、一三八頁
- (29) 前掲書、一九〇頁
- (30) 前掲書、二三三頁
- (31) 前掲書、六〇頁
- (32) 『松山教会百年史稿』一一二頁
- (33) 前掲書、一一二頁
- (34) 村井知至『邦文閃光録』昭和十四年、六四頁
- (35) 前掲書、七一頁
- (36) 魚木忠一『日本基督教の精神的伝統』基督教思想叢書刊行会、一九四一年



- (37) E・N・編『我と父とは一なり』一七一頁
- (38) 前掲書、一八頁
- (39) 榎本保郎牧師は、今治教会の牧師をつとめ、アシラム運動をおこした。三浦綾子『ちいろば先生物語』（一九八七年）の主人公として描かれている。
- (40) 松山地方の俳壇の歴史については『愛媛県史・文学』愛媛県、（一九八四年）参照
- (41) 村井知至『邦文閃光録』九三頁
- (42) 前掲書、二二二頁
- (43) 前掲書、一一二頁
- (44) 村井知至『無弦琴』二二七頁
- (45) 『松山教会百年史稿』一六二頁―一六三頁
- (46) 松山城南高等学校『松山城南高等学校八〇年誌』一九七二年、一四二頁
- (47) 今井新太郎『貧しき歩み』一九六六年、三四頁―三七頁
- (48) 魚木忠一『基督教精神史研究』全国書房、一九四八年
- (49) 魚木忠一『日本基督教の精神的伝統』基督教思想叢書刊行会、一九四一年
- (50) 魚木忠一『木月遺稿』
- (51) E・N編、吉田清太郎『我と父とは一なり』九二頁
- (52) 村井知至『無弦琴』二四二頁―二四三頁
- (53) 前掲書、二四四頁
- (54) 村井知至『蛙の一生』四二頁―四三頁
- (55) 生島吉造、松井全編『同志社歳時記』、一九七六年、八頁
- (56) 松浦政泰『同志社女学校の特質』、『同志社女学校期報』第一号、『同志社歳時記』八頁